隠れ御曹司の
手加減なしの独占溺愛

冬野まゆ
Mayu Touno

Eternity
BUNKO

目次

隠れ御曹司の手加減なしの独占溺愛　5

書き下ろし番外編
Bienvenue　313

隠れ御曹司の
手加減なしの独占溺愛

プロローグ　不埒な罠は夜に溶け込む

弄月荘――美しい日本庭園と、行き届いたサービスで高い支持を受ける老舗ホテルだ。外国人観光客の人気も高い。

古くは月の名所として俳句に詠まれたこともある日本庭園で、戦前は貴族院の議長を務めた大物政治家の別邸だった。しかし戦後、観光事業やホテルを多角経営する真嶋興業、後のマシマホールディングスの所有となり、併設したホテルの一部となった。現在は庭園に手を加えて宴会場や結婚式場としても利用されている。

「……」

七月のある夜。

八方塞がりな状況に行き詰まって必要のない検索をしていた千羽香奈恵は、深いため息と共に目頭を揉んだ。

人気のないオフィスは節電のために半分照明が落とされていて、それが香奈恵の気持

ちをより一層陰鬱なものにしている。

パソコンのモニターに表示されているのは、ホテル巡りが趣味という個人ブロガーのサイトで、弄月荘の簡単な解説文の後には、ありがたくもホテルを褒める文が続く。

しかもその書き込みの下には、弄月荘で挙式をした人からの賞賛のリプライが付けられていた。

普段なら仕事の励みになるそれらの言葉が、今はただただ辛い。

「明日の式、どうしよう……」

香奈恵は、パソコン上部に表示される時刻を確認して唸る。

というのも、明日、香奈恵がプランニングを担当した挙式で、生演奏する予定のバンドの手配ができていないからである。

正しくは、香奈恵は新郎新婦の要望に沿ったジャズバンドの手配を滞りなく済ませていた。しかし、直前になってそのバンドメンバーの半数が体調を崩し、当日の演奏を断念せざるを得なくなったのである。

バンド側がその旨を伝えてきたのは式の二日前。その時点で香奈恵に情報が上がってきていれば、代わりのバンドを手配することもできただろう。

だが連絡を受けた部下の西村晶子が、そのことをすっかり忘れていたのを今日の帰り際になって思い出し、香奈恵に報告してきたのである。

しかも本人は、青くなる香奈恵をよそに「私がいてもなんの役にも立ちませんし、約束があるので対応はチーフにお任せします」と、定時でいそいそと帰ってしまった。

晶子は数日前から、今日は優良物件との合コンがあるとはしゃいでいた。そんな彼女を無理に残らせたところで、恨み言を口にするだけだろうと引き止めなかったけれど、彼女がちゃんと連絡してくれていたらという香奈恵の恨み言はどうしても残る。

「ついでに言うと、これはプチブライダルの仕事じゃないし」

一人でマウスを操作しているうちに、つい愚痴が口から溢れてしまう。

香奈恵は今、この弄月荘のブライダル部門で自分が立案から携わっているプチブライダルという企画のチーフを任されている。

プチブライダルとは、平日の仏滅といった式場の稼働率が下がる日限定でプライスレスなフォトウェディングのプランだ。香奈恵の案が社内コンペで採用されたものなので思い入れが強い。

とはいえ、残念ながらプチブライダルの仕事はそれほどないため、普段は香奈恵とその下で働く二人の部下は、他のブライダルスタッフと一緒の業務を担うことが多い。

――それにしても、西村さんって堀江さんを狙っているんじゃなかったの？

情報を求めてマウスを操作しつつ、そんなどうでもいいことを考える。

堀江さんこと堀江雅之は、晶子同様、香奈恵の部下の一人だ。部下といっても、中途

採用で入ってきた雅之の方が、二十七歳の香奈恵より六歳ほど年上である。

外資系大手金融機関からキャリアチェンジしてきた彼は、長身で均整の取れた体つきをしていながら、野暮ったい眼鏡と長めで無頓着な髪型のせいで、全体の印象をやや残念なものにしている。イケメンといった印象はないが、ふとした拍子に眼鏡の隙間から見える切れ長の目は綺麗な形をしていた。

ついでに言うと性格は至って温厚で、仕事でがつがつ前に出てくるようなこともなく、性別や年齢を気にせずに上司の香奈恵を立ててくれる良い部下である。

カテゴリーで分類するなら、〝性格イケメン〟といったイメージだろうか。

そんな雅之に、晶子はことあるごとにアプローチしていた。

常々、『夢はイケメンセレブとの結婚！』と豪語して、挙式の打ち合わせに来る新郎にまで色目を使うような晶子の行動としては、少々意外である。もしかすると、彼女にとって恋愛と結婚は別なのかもしれない。

なんにせよ、今日はその雅之が休みだったこともあり、晶子は朝からやる気がなく、頭の中は夜の合コンのことでいっぱいのようだった。

雅之が出勤していれば、少しくらいはバンドを探す手伝いをしてくれたかもしれないけど……

「いかん、いかん」

当てのない探し物に疲れて、どうでもいいことばかり考えてしまう。
香奈恵は軽く首を横に振り、思考を引き戻す。
このままでは、明日の披露宴の参列者だけでなく、ネットで評価してくれる人たちの思いまで裏切ってしまうことになる。
自分のせいで弄月荘の評判を落とすわけにはいかないし、それ以上に、あれだけ入念な打ち合わせを重ねてきた新郎新婦をがっかりさせてはならない。
なにか打開策はないだろうかと、再び思いつくワードを打ち込んではマウスを動かしていると、オフィスの扉が開く音がした。
もしかして晶子が戻ってきたのだろうかと振り返ると、ドアノブに手を掛け、片足だけ事務所に踏み入れた状態で動きを止めた男性と目が合った。
「なんだ、堀江さんか……」
野暮ったい眼鏡をかけた背の高い男性の姿に、ついそんな言葉が漏れてしまう。
「なんだとは、失礼ですね。他の誰かを期待していたんですか？」
冗談めかした口調で抗議してくる雅之は、どこかいつもと雰囲気が違って見える。
その答えを求めて、香奈恵は雅之の頭の上からつま先へと視線を走らせた。
今日の彼は、野暮ったい眼鏡はいつもと同じだけど、普段は無頓着な印象の髪をワックスで整え、服は清潔感のある白地のTシャツに黒のセットアップを着ている。

髪型と服装だけで、人はここまで印象が変わるのかと驚いていると、雅之がクシャリと、前髪を掻き上げて笑った。
「……？　俺の顔になにかついてる？」
「……いいえ」
大人の余裕を感じさせるその笑い方に、香奈恵は妙にソワソワした気分になってパソコンへ向き直る。
――どうやら彼は、休日をしっかり楽しんできたらしい。
理解不能な違和感の理由を、そういうことにしておく。なにより、今はそんなことに気を取られている場合ではないのだ。
「チーフはまだ仕事？」
オフィスに入ってきた雅之が背後に立つ気配がする。
「ええ。少しトラブルがあって。……堀江さんは、休みの日にどうしたんですか？」
軽く腰を捻って振り向くと、雅之は香奈恵のデスクと背中合わせの位置にある自分のデスクに手をかけていた。
「ちょっと忘れ物をして」
職場の肩書きは一応香奈恵が上になるが、年齢的にも社会人経験においても雅之の方が上なため、つい敬語で話してしまう。対する雅之は、状況によって香奈恵に対する言

葉遣いを分けていた。
仕事中は敬語で話しかけてくることが多いが、世間話をする時などは砕けた口調になる。休日の今日は、声のトーンからして後者のようだ。
検索作業を再開する香奈恵の背後で、彼が自身のデスクを漁る気配がする。
「トラブルって？　俺になにか手伝えることは？」
引き出しの中を漁りながら、雅之が聞いてくる。
「一人で大丈夫です」
連絡ミスをした晶子が手伝うならともかく、下手に事情を話して休みの彼に仕事をさせるわけにはいかない。
軽い口調で返した香奈恵に、背後の雅之が動きを止めた。
「……」
背中に感じる視線に居心地の悪さを覚えて振り返ると、案の定、じっとりとした眼差しを向ける雅之と目が合う。
「チーフ、また一人で問題を抱え込んでいませんか？」
「別に……」
眼鏡越しに向けられる眼差しが痛い。それでも立場的に、休日の彼に頼るわけにはいかないのだ。

香奈恵が視線を逸らして黙り込むと、雅之は大きなため息を吐いて乱暴に髪を掻き回す。そして香奈恵に困った顔を見せた。
「そうやって自己完結するの、チーフの悪い癖だから。もっと素直に助けを求めてくれないと、こちらも助けようがない」
確かにそれは香奈恵の悪い癖なのかもしれない。
自分が頼ることで他の人の負担が増えては申し訳ないと、ついなんでもかんでも一人で背負い込んでしまう。そうやってオーバーワーク気味に働くことを、これまでも雅之に指摘されたことがあった。
「本当に困った時は、ちゃんと頼らせてもらいます。でもこれは、私一人で対応できる範囲のトラブルだから」
駄目だとわかっていても、人間、そう簡単に性格は変えられない。
気にしなくて大丈夫だと軽い口調で返すと、雅之が眼鏡の縁を押さえて再び深いため息を吐いた。
そうやって物言いたげな視線を向けられると、気を遣って彼に頼らない自分が、逆に悪いことをしている気になってくる。
居たたまれなくなって、その視線から逃れるように再びパソコンに向き直った。
そうやってやんわりと拒絶の態度を示すことで、雅之が諦めて帰ってくれるのを待っ

ているのに、一向にその気配がしない。それどころか、雅之の気配がより近くなった気がした。

香奈恵が振り返るより早く、彼が背後から覆い被さってくる。

「――っ！」

突然のことに驚いて、香奈恵は身を硬くする。

雅之はそんな香奈恵に構うことなく、マウスを持つ彼女の手に自分の右手を重ね、左手を肩にのせた。

「大したことないなら、こんな時間まで仕事してないでしょ……」

仕事の時はセミロングの髪をきっちりとシニヨンに結い上げているため、無防備に晒された首筋に彼の吐息がかかる。

「ちょ……近いっ」

香奈恵のことを異性とカウントしていないのか、雅之は抗議を無視して重ねた右手を動かしていく。

そうなると自分一人が過剰に意識しているようで、反応しにくい。

どうしたものかと腰を無理やり捻って雅之を見上げると、真剣な彼の表情が目に飛び込んできた。

喉仏の目立つ首筋、普段ならスーツの襟で見えにくい場所に小さな二つのホクロがあ

る。それに、普段は眼鏡に目がいって気にしていなかったが、唇の右下にあるホクロが妙に色っぽい。

いつもと違う距離のせいなのか、部下に男の色気を感じてしまう。

もしくは、恋愛経験が少なすぎる自分の脳が、過剰反応しているのかもしれない。

――落ち着け、私っ！

香奈恵は唇を強く噛んで自分を叱咤する。

しかし、普段はほのかな整髪料の香りしかしない彼から、存在感を誇示するような甘い香りがしていることに気付いてしまい、どうしても鼓動は加速していく。

「ジャズの演奏家を探している？」

ひとしきりパソコンを操作した雅之が、そう言ってこちらに視線を向けた。

先ほどからネット検索で目星をつけては関係者に連絡を取るという作業を繰り返していたので、検索履歴から香奈恵がなにをしていたのか推測したようだ。

「それは……」

「今さら隠したって、どうせ明日になればわかることだよ」

彼の口調がいつもより砕けているのは別に構わないのだけど、距離感がおかしいように思えて落ち着かない。

「……そうですね」

確かに一緒に仕事をしているのだから、明日、彼が普通に出勤すればどのみちバレることだ。それなら、これ以上隠しても意味はない。

渋々認めた香奈恵に、雅之は軽く顎を動かしてその先を促してくる。

香奈恵は仕方なく、相談とも愚痴ともつかない口調で、こんな時間まで一人でオフィスに残っていた経緯を説明した。

全てを話し終え、そろそろ手を離してほしいと、さりげなくマウスを持つ手を動かすけれど、困ったことに雅之が察してくれる気配はない。

「……なるほど。電話をかけるのを手伝おうか？」

手を重ね、体を密着させたままの姿勢で、雅之が問いかけてくる。

香奈恵が首を横に振ると、「部長に報告は？」と離れた位置のデスクに視線を向けた。

「報告はしたけど、部長も今日は休みで出先だから、こちらに対応を任せたいって」

「今日は、仏滅だからなぁ」

香奈恵の返答に、雅之が唸る。

ブライダル関係の仕事は、土日や祝日が忙しい分、仏滅などゲンが悪いとされる日は比較的仕事が少ない。

それもあって、仏滅の今日は、部長も雅之も休みを取っていた。

「部長も私に一任したんです。だから堀江さんも、気を遣わないで帰ってください」

香奈恵の首筋に、再び雅之の不機嫌な吐息が触れる。

「チーフ一人で責任を負うにしても、タイムスケジュールを考えたら、もうアウトじゃないか？」

肩に置いていた手を離し、雅之は腕時計を確認する。その動きにつられて香奈恵も壁掛け時計に視線を向けると、時刻は午後九時になろうとしていた。

確かに、今から新郎新婦の要望に合ったクオリティーのバンドを見つけられたとしても、曲の打ち合わせなどの時間を考慮するとかなり厳しい。

こちらで打てる手としては、生演奏を諦めてCDに頼るか、ホテルで契約しているピアニストに曲をアレンジして演奏してもらうかになるが……

どちらの代替案になったとしても、弄月荘側はクライアントの希望に沿った挙式を提供できなかったお詫びとして、値引きやその他のサプライズで誠意を示すことになる。

だが新郎新婦にとって、明日の挙式は人生の特別な一日だ。できることなら、そんな足し算引き算で帳尻を合わせるような提案をしたくない。

「先方へのお詫びの報告、こっちでしようか？」

時計を見上げていると、雅之にそう聞かれた。

香奈恵は謝罪が嫌で粘っているわけではない。

「必要なら、自分でちゃんと謝罪するから気にしないでください。これは、そういうこ

とじゃないから」

香奈恵が悔しさからマウスを持つ手に力を入れると、不意に重ねられていた手が離れる。

姿勢を戻した雅之は、自分を見上げる香奈恵に向かって、右手でピースサインを作った。

――なんのピースサイン？

訝る香奈恵に、雅之は意味深に口角を持ち上げた。

「チーフには、二つの選択肢がある」

そう言って彼は、右手のピースサインを揺らす。

どうやらこの二本の指は、選択肢の数を表しているらしい。

「どんな？」

素早く反応する香奈恵に、雅之の笑みが深まる。

普段とは異なる彼の表情に警戒しなくもないが、今はこの状況を打開する策があるのなら聞き逃すわけにはいかない。

椅子を回転させて座ったまま向き合った香奈恵に、雅之は満足げに目を細めた。

無言で相手の言葉を待っていると、雅之は二本の指のうち一本を折り曲げて言う。

「一つは、新郎新婦に妥協してもらってＢＧＭは生演奏でなくＣＤを流す。もしくはピ

アノのみの演奏に切り替える。……こういった不測の事態における演出内容の変更については、契約書に明記してあるのだから、こちらは連絡が遅くなったことへの謝罪をし、料金を割り引くというのが妥当な対応だ。話を聞く限り、今回のことはチーフ一人の責任じゃないし、結果に対して罪悪感を覚える必要はない」

それは、最終手段として何度も香奈恵の頭を掠めていた。

だけど……

「新郎新婦は、ジャズ好きが縁で知り合ったそうです。招待客にもジャズ好きな人が多いそうで、式ではどうしてもジャズの生演奏を聴かせたいと仰っていて……」

これまでの打ち合わせを思い出し、二人の生演奏に対する思い入れを無下にしたくないと視線で訴える。

そんな香奈恵の眼差しを受け止めた雅之は、仕方ないといった様子で優しく微笑む。

「もう一つは……」

一度折り曲げた指を伸ばして、雅之は言葉を続ける。

「チーフに代わって、自分が最高のジャズバンドを手配します」

「え？」

そんなことが、できるのだろうか……

香奈恵だって夕方から今まで、できる限りの手を使って各所に問い合わせていたのだ。

それでも急な依頼で時間がないことと、希望する演奏リストの難しさから引き受けてくれるバンドを見つけられずにいた。
失礼かもしれないが、自分ができなかったことを雅之ができるとは思えない。同じ業界から転職したというならまだしも、彼は、去年まで畑違いの金融系の仕事をしていたのだ。
思わず疑うような視線を向けてしまうと、雅之が右側の口角を持ち上げ、癖のある笑みを浮かべて言う。
「その代わり、チーフには俺のお願いを一つ叶えてもらいたい」
いつも以上に砕けた雰囲気の彼に対し、本能的に身構える。
「……なんだか、悪巧みの匂いがするんですけど」
警戒する香奈恵の眼差しを楽しむように、雅之はニヤリと笑う。
「否定はしないな。だけど、どちらを選択するかは、チーフの自由だよ？」
そう言って、彼は二本立てた指を自分の唇に添えた。
そしてタバコの煙を吐くように香奈恵に細い息を吹きかけ、ゆっくりと目を細める。
不意に、自分の知る堀江雅之とはこんな人だっただろうかという疑問が湧いてくる。
――堀江さんの皮を被った、まったくの別人を相手にしているみたい。
なんだか、悪魔に契約を持ちかけられているような気になってくる。

古今東西、悪魔と契約を交わしたらろくな結果にならないのは周知の事実だ。
しかし、どうしても新郎新婦の願いを叶えたいと思っている香奈恵には、初めから選択肢は一つしかない。
「その場合、私はどんな願い事を叶えればいいの？」
警戒しつつ問い返す香奈恵に、雅之は勝者の笑みを浮かべて願いを口にした。
「……そんなことでいいの？」
雅之の願いを聞いた香奈恵は、拍子抜けしたような声を上げる。
もちろん多少の抵抗を感じる要望ではあるが、悪魔との契約をイメージしていただけに、なんだそんなことかと思える内容だった。
キョトンとして瞬（まばた）きをする香奈恵に、雅之は二本の指で顎（あご）のラインを撫でて同じ言葉を繰り返す。
「そう。家族との食事会で、一日だけ俺の恋人のフリをしてもらいたい」
「どうして？」
「色々と事情がありまして。家族には一度、恋人を紹介しておきたいんだ」
雅之は面倒くさそうに息を吐く。
その表情に、香奈恵はなんとなく察するものがあった。
何故なら彼女自身、似たような悩みを抱えているからだ。両親はともかく、地方で農

家を営む祖父母は、香奈恵の年齢なら結婚しているのが普通だと言って譲らない。
そんな祖父母に、バカ正直に結婚以前の問題として恋人もいないと報告した結果、痛々しい眼差しを向けられると共に、あれこれ見合い話を持ってこられて大変迷惑している。
もしかしたら雅之も、自分と似たような状況なのかもしれない。
「一日だけでいいんですよね？」
念を押すと、雅之は「一日だけで十分」と断言する。
「……」
それならば……と、思う反面、なにか心の片隅に引っかかるものがあって、すぐに頷くことができない。
「どうかした？」
返事を待つ雅之が、柔らかな微笑みを浮かべて首を傾ける。
そんな彼を上目遣いに見ながら、おずおずと口を開いた。
「なんか今日の堀江さん、いつもと感じが違うんですけど……」
「気のせいじゃないか？」
軽く顎を上げて、どこか楽しんでいるようなその表情は、妙に色っぽい。
普段なら〝性格イケメン〟の彼の提案を素直に受け入れるところだが、今日に限って

は、なにか裏がありそうで警戒してしまう。
返事を躊躇う香奈恵に、眼鏡の向こうの雅之の目が細まった。
「チーフから見て、一日限定の恋人役も引き受けたくないくらい、自分が男としての魅力に欠けているならそう言ってくれていいですよ。傷付いたりしませんから」
控えめな発言をする雅之だが、表情にはしたたかなものを感じる。
とはいえ、躊躇ったところで、香奈恵には選ぶ道は一つしかないのだ。
「いいえ、お願いします」
藁をも掴む気持ちで告げると、雅之が嬉しそうに微笑んだ。
「じゃあ、契約成立ということで」
そう言って差し出された右手を、香奈恵は握り返した。
この選択が、悪魔との取引に匹敵するくらいの厄介事に繋がるなんて、その時の香奈恵はまだ知る由もなかった。

1　真嶋家の家庭事情

翌日、弄月荘で執り行われている披露宴を見守りながら、香奈恵はホッと胸を撫で下

ろしていた。

昨夜、香奈恵と契約を交わした雅之は、その場でどこかに電話をかけ、あっという間に今日のバンドの生演奏の依頼を取り付けてしまったのだった。香奈恵一人では、まともな交渉先を見つけることすらできなかったのに、驚くばかりである。

あまりにスムーズに決まったので、もしかしてアマチュアバンドかと心配したが、雅之は電話交渉の間にバンドの所属する芸能事務所のサイトを見せてくれた。

それによると、キャリアも長く、海外で演奏実績もあるバンドのようだった。キャリアに裏打ちされた自信があるせいか、唐突な依頼を快諾してくれただけでなく、予定している曲目の打ち合わせをする時間がろくにないことを心配する香奈恵に、過去に自分たちがその曲目を演奏した時の動画まで送ってくれた。

彼らの技量を確認した上で、式当日、着付けに入る前の最終チェックのタイミングで新郎新婦に事情を説明して演奏者の変更を伝えたところ、興奮した様子で歓声を上げたのだった。

ジャズにあまり詳しくない香奈恵ではあるが、新郎新婦の興奮ぶりから、雅之のチョイスに間違いがなかったのだと理解する。

そして今、会場の隅っこで彼らの生演奏を聴き、その腕前が素晴らしいものであると実感していた。

「ご満足いただけたようでなによりです」

互いに目配せしながら演奏を楽しむ新郎新婦の表情にニンマリしていると、突然背後から声をかけられた。

驚いて肩を跳ねさせた香奈恵が振り向くと、黒のスーツをきっちり着込んだ雅之が立っていた。

「堀江さん」

「ブランシェの多田さんからお電話がありました。この後はずっと事務所にいるので、都合のいい時間にお電話くださいとのことです」

ブランシェの多田とは、挙式でブライダルブーケの発注をかけているフラワーショップのオーナーである。

「ありがとう。あと、バンドのことも助かりました」

そう言って香奈恵は扉の方へ歩き出した。

「演奏、気に入ってもらえたようですね」

式場を出る瞬間、新郎新婦の姿を再度確認して香奈恵が頷く。

「うん。堀江さんのおかげで、すごく喜んでいただけているみたい」

香奈恵に続いて式場を出た雅之も、笑顔の新郎新婦に表情を綻ばせる。

二人の門出を祝福する柔らかな眼差しに心を和ませていると、扉を閉じた雅之の視線

が自分に向く。突然真っ直ぐに見つめられて緊張し、その気まずさを誤魔化すべく話題を振った。

「堀江さんに、こんなすごいツテがあるなんて驚きました」

「親がそっち系に強い仕事をしているので」

雅之がそう返した時、一度閉めた扉が再び開き、バンケットスタッフが出入りする。通行の妨げにならないようにと、雅之は香奈恵に体を寄せて通路を空けた。

必要以上に体が密着しないように雅之の胸に手を添えて一定の距離を保った香奈恵は、昨日と似た距離で彼を見上げる。

今日は、式場スタッフらしくシャツのボタンを首元まできっちり留めてネクタイを締めているので、首筋のホクロを確認することはできない。

そんなことはないとわかっていても、つい昨日の彼は幻だったのではないかと疑ってしまう。

「次の仏滅、チーフは午後から休みですよね？」

「ええ。午前中にプチブライダルを利用するお客様の撮影に立ち会うだけだから」

久しぶりのプチブライダルの利用客に、気合が入る。

嬉しさから頬に小さなエクボを作る香奈恵に、雅之が小さく笑って言う。

「私も休みなので、その日の夕方に食事会の予定を入れてもいいですか？」

その言葉に、彼と交わした約束を思い出す。

約束を反故にするつもりはないけれど、明確な予定を告げられると、なんだか尻込みしてしまう。

そんな香奈恵の弱気を見透かしたように、微かに背を屈めた雅之が耳元で囁いてきた。

「逃がしませんよ」

「――っ！」

息が耳に触れるのを感じて、反射的に手で押さえて彼を見上げた。

「逃げません！　その日で大丈夫です」

約束は必ず守りますと、真剣な眼差しを向ける。

眼鏡越しに視線を重ねると、雅之がそっと目を細めた。普段あまり意識することはないが、彼は知的な印象の綺麗な切れ長の目をしている。

そしてその瞳の奥に、普段の彼からは感じることのない野性的な光が揺れている気がして、香奈恵は後退りできないのを承知で背後の壁に背中を密着させた。

「……」

昨夜から、二人の間に流れる空気がいつもと微妙に違う。

それを息苦しく感じていると、突如、彼の背後から甘い声が聞こえてきた。

「あ、堀江さぁんっ」

語尾にハートマークでも付きそうな甘ったるい声と共に、晶子がひょっこりと顔を出した。

バンケットスタッフとして駆り出されている晶子が、空になったシャンパングラスを載せたトレイを両手で抱えたまま、雅之との距離を詰めてくる。

そんな彼女と距離を取るべく、雅之が立ち位置をずらした。自然と香奈恵との間にも距離ができて、二人の間に漂っていた密度の高い空気が霧散していく。

それにホッとする中、晶子が大袈裟に眉尻を下げて言う。

「今日のバンド、私のために堀江さんが手配してくれたんですよね」

『私のため』と強調して話す晶子は、その直後、「ごめんなさい」としおらしく肩を落とす。

そしてそのまま、自分は責任を感じていたのだけど、チーフである香奈恵から早く帰るように強く勧められたことで退社するしかなかった、そのせいで昨日はろくに眠れなかった、といったことを言い始める。

そしてその締めくくりとして、甘ったるい声で言った。

「このお礼に、今度食事をご馳走させてください。ちょうど友達に、素敵なイタリアンのお店を教えてもらったんです」

トレイを持っていなければ、ボディータッチをしながら話しかけそうな熱っぽさだ。

そんな晶子に、雅之はそつのない微笑みを添えて返す。

「私が手配できたのは、ただの偶然ですよ。忘れ物を取りにきた際、一人で対策を講じようとしていたチーフから話を聞かなければ、事情を知ることすらなかった。だからお礼は、チーフにしてください」

「チーフ、イタリアンは嫌いです」

雅之の言葉に晶子が即答した。

――いえいえ。イタリアン、好きですよ。

別に晶子にご馳走してもらうために頑張ったわけではないので、ツッコミは心の中に留めておく。

「とりあえず今は、バンケットスタッフの仕事を頑張って」

香奈恵の声なきツッコミが聞こえたわけではないだろうけど、雅之が苦笑を浮かべつつトレイを持つ晶子の肘に手を触れてそう急かす。

すると晶子は、可愛らしくチラリと舌を出してトレイを抱えて小走りにその場を離れていく。

意外と女性のあしらいがうまいなぁと、二人のやり取りを見て感心していると、雅之がからかうような口調で聞いてくる。

「イタリアン、ご馳走しましょうか？」

「この場合、ご馳走するのは、私の方でしょ」
「残念ながら、女性に奢ってもらう習慣はないので。だから私がご馳走しますよ」
雅之は軽く肩をすくめる。そして「西村さんより、いい店を知ってますよ」と、茶目っ気たっぷりに付け足してくるので、香奈恵も肩をすくめた。
「部下に奢らせるわけにはいきませんから」
香奈恵の言葉に、雅之がやれやれといった感じで息を吐く。
これまでの雑談でも、会話の流れでプライベートな時間に食事でも行こうかといったノリになることが何回かあった。だけど部下と上司の関係なだけに、プライベートで会うのは躊躇われ、誘われる度に冗談として受け流してきた。
「今回のお礼は、来週の食事会に付き合っていただくだけで十分です」
すかさずそう返されて、香奈恵は遠ざかっていく晶子の背中へ視線を向けた。
晶子も香奈恵同様、白のノーカラーのブラウスに黒のパンツスーツといったユニフォーム姿に身を包んでいる。それでも明るく染めた髪や、首筋を飾るスカーフの巻き方などで個性を主張する彼女には、人目を引く可愛らしさがあった。
それに比べて……と、香奈恵は壁に設置されている姿見に視線を向ける。身だしなみチェックのために設置されている鏡には、マニュアルどおりにユニフォームを着て、癖のないセミロングの髪をシニヨンにまとめた自分の姿があった。

鼻筋やくっきりとした二重の目が綺麗だと友達に褒められることはあるが、ブライダルスタッフとして無難なメイクを心がけているので特にそれを際立たせるようなことはしていない。
ついでに言うなら、感情表現が苦手なために表情筋が硬い。
同性の目から見ても、確実に可愛いのは晶子の方だ。
「恋人役、西村さんに頼めばよかったのに」
自分のように愛想のない人間に恋人役を頼むより、彼女の方が適任ではないだろうか。なにより晶子は、雅之に好意を持っているのだし。
「こちらにも相手を選ぶ権利があります。彼女にお願いすると、後々面倒そうですから」
「……確かに」
面倒くさそうにため息を吐く雅之の言葉に、香奈恵はそういう考え方もあるかと納得する。
上司と部下として一線を引いた付き合い方を心がける香奈恵とは違い、わかりやすく好意を寄せている晶子にそんなことを頼めば、そのままズルズルと交際を迫られそうではある。
「なんだかその台詞、すごくモテる男感が出てますね」

香奈恵のからかいの言葉に、雅之は気を悪くする様子もなく「失礼な」と笑う。
年齢差があり、立場としては上司と部下という逆転した関係ではあるが、人柄がそうさせるのか、彼といると時々こういうじゃれ合いのような会話を楽しんでしまう。
クスクス笑いながら事務所に戻るべく歩き出すと、香奈恵を探しにきただけの雅之も歩調を合わせてついてきた。
「そういえばチーフ、今回のバンドの件、私が手配したと部長に報告したんですね。黙っておけばいいのに」
隣を歩く雅之が思い出したように言うが、香奈恵はそんなわけにはいかないと首を横に振った。
「当然です。あれは堀江さんの人脈があってのことなんですから」
「でもお客様のためを思って、遅くまで頑張っていたのはチーフです」
香奈恵の言葉に、雅之が困ったように目尻に皺を寄せる。
そんな彼の表情を見て、香奈恵は深く息を吐いた。
雅之は頭の回転が早く機転も利くので、その瞬間、誰がなにを必要としているのかを察する能力に長けている。なので、部署を問わず頼りにされていた。
前職からそういう立ち位置にいたのか、雅之自身も、周囲を支えて人を立てることに慣れている様子で、その分自ら率先して前に出るといった意識に欠けているように思う。

名脇役、縁の下の力持ちといえば聞こえはいいが、香奈恵としては、彼のその性格がもどかしい。
「私はもっと堀江さんに本気になってほしいと思っています。誰かに遠慮することなく、もっと自分のために実力を発揮してほしいんです」
雅之は人を惹きつけ、相手の心を動かす不思議な魅力に溢れている。
晶子のような下心はないが、かくいう香奈恵も、彼の不思議な魅力に背中を押されてこれまで頑張ってこれたのだ。
香奈恵が任されているプチブライダルは、正直、業績が芳しいとは言えない。まだまだチーフとして未熟な香奈恵と、新人教育を兼ねて任されている晶子と、異業種から転職してきたばかりの雅之。そんな心許ないメンバーでもここまで頑張ってこれたのは、雅之のバックアップがあってこそだと思っている。
そのことへの感謝の意味も込めて、香奈恵としては、雅之にもっと前に出て正当な評価を受けてもらいたい。
もしかしたら、雅之には転職してきたばかりという遠慮があるのではないか。……そんな心配もあるので、香奈恵はことあるごとに雅之に前へ出るよう促していた。
「それ、チーフよく言いますよね。『上司だからって遠慮しないでください』『もっと本気でぶつかってきてください』って」

香奈恵の口調を真似る雅之の話し方に、こちらの思いは届いていないのだとがっかりする。

大人気ないとは思いつつ、つい唇を尖らせてしまった。そんな香奈恵に、雅之が挑発的な眼差しを向けてくる。

「それを言うなら、チーフはいつも一人で仕事を抱え込む性格を直してください。人に頼ることも覚えないと、いつか立ち行かなくなりますよ」

昨夜、まさに八方塞がりな状況に追い込まれているところを助けてもらっただけに、耳が痛い。

黙り込む香奈恵の姿に、雅之がため息を吐く。

「そこで黙るってことは、これからも一人で抱え込む気でいますね」

確かに自分の働き方はうまくないと思う。

でも、人に頼ることで相手に迷惑をかけてしまう方が嫌で、ついあれこれ抱え込んでしまうのだ。

とはいえ、曲がりなりにも上司として、そんな背中を部下に見せるのは良くないだろう。

「なるべく、気を付けます」

「そうですね。でないと、私に足を掬われますよ」

渋々といった感じで香奈恵が返すと、軽い口調で忠告される。

「はいはい」

雅之に足を掬われたところで大したことはない。

彼の忠告を軽く受け流しつつ従業員用の廊下を歩いていると、先の扉が開き、上質なスーツに身を包んだ長身の男性が姿を見せた。

見送りで付き添ってきたホテルスタッフと二言三言会話を交わしているのは、この弄月荘の総責任者である真嶋祐一グランドマネージャーだ。

グランドマネージャーというだけでも香奈恵にとっては雲の上の存在なのに、その上、彼はグローバルに観光事業やホテル経営を繰り広げるマシマホールディングスの御曹司なのだ。視界に入るだけでも、つい緊張で背筋が伸びる。

「真嶋マネージャーだ」

――イケメンや王子様という言葉は、彼のような人のためにあるのだろうな。

彼は、今はまだ弄月荘のグランドマネージャーに留まっているが、将来的にはマシマホールディングスを背負って立つのだ。

容姿といい社会的地位といい、晶子が望む結婚相手はきっと彼のような人だろう。

たださすがの晶子も、自社の御曹司にアプローチすることはしていないようだが。

「チーフは、ああいう顔が好みなんですか？」

その言葉にチラリと視線を上げると、雅之はひどく不満げな顔で「付き合うなら、ああいう男が理想ですか？」と付け足す。

「好みっていうか、イケメンを遠目に愛でるのは、普通の感覚でしょう」

別にお近付きになりたいとは思わないが、遠目に眺める分にはマネージャーのイケメンぶりは目の保養になる。

それなのに雅之は、なおも重ねて聞いてくる。

「マネージャーみたいな地位の人との結婚とか、どう思いますか？」

その問いかけに、香奈恵はふるふると首を横に振る。

「そんなのあり得ないでしょ」

お伽話や漫画じゃあるまいし、一般家庭で育った香奈恵が、容姿端麗でどこまでも完璧な御曹司と付き合えるなんて思うはずがなかった。

ましてやそんな人との結婚など、夢想するのもおこがましい。

香奈恵はくだらないと肩をすくめて、扉を閉めた祐一マネージャーに一礼して脇を通り過ぎようとした。だけどその時、祐一マネージャーが「あっ」と声を漏らして手を動かす。

視界の端で捉えた手の動きに反応して足を止めると、祐一マネージャーは、雅之から香奈恵へと視線を向けて口元を手で隠す。

長い指の隙間からチラリと見えた彼の唇は、何故か笑いを噛み殺しているように見えた。

その笑いはなにを意味しているのだろうかと、隣の雅之に視線を向けると、彼は涼しい顔をしている。

「お疲れ様」

口元から手を離して挨拶してくる祐一マネージャーは、綺麗に表情を取り繕っていて、優雅な王子様然としていた。

「真嶋グランドマネージャー、お疲れ様です」

一瞬見えた祐一マネージャーの表情が気になったけれど、掘り下げて質問するほどのことではない。

香奈恵が丁寧な所作で一礼すると、隣で雅之も頭を下げる。

自分たちとすれ違う際、祐一マネージャーが雅之の肩を軽く叩き、「昨日は休みなのに、呼び出して悪かったな。でも助かったよ」と声をかけていった。

――昨日？

昨日、休みなのにオフィスに顔を出した雅之は、忘れ物をしたのだと言っていた。でも今の言い方だと、雅之は祐一マネージャーに呼び出されたらしい。

「あの……」

再び歩き出しながら祐一マネージャーの言葉の意味を尋ねようとした時、その声に被せるように雅之が言う。

「さっきの話ですけど、そろそろ俺も本気を出そうと思います」

「え？」

「もっと本気になれって言ってくれたでしょ。自分に遠慮する必要はないって」

宣戦布告といった感じでニヤリと笑う雅之に、背筋を伸ばす。

いつも他人をフォローすることに徹している雅之だが、もっと自分のために仕事をしてほしいとずっと思っていた。そうすることで、きっとこのチームはさらに良くなる。

それで互いの立場が入れ替わったとしても、香奈恵に不満はない。

「受けて立ちます」

オフィスに辿り着き、ドアノブに手を掛けながらそう返す。

上司として期待していますと、挑発的な眼差しを真っ向から受け止める。すると雅之が、ドアノブを掴む香奈恵の手に自分の手を重ねてきた。

思わず見上げた彼の瞳に、妖しげな光が揺れている。重ねられている手の温度に、昨夜の男の色気を纏った彼の姿を思い出して胸がざわついた。

雅之は戸惑いの色を浮かべた香奈恵の顔を真っ直ぐに見つめ、「その言葉、忘れないでくださいね」と不敵な笑みを見せた。そして満足そうに目を細めると、重ねている手

に力を加えて扉を開く。

カチャリと金属が擦れ合う微かな音が、やけに耳についた。

「戻りました」

張りのある声でそう告げて重ねていた手を離した雅之は、人畜無害な表情で香奈恵のために扉を押さえてくれる。

いつもの彼らしい気配りに感謝を告げつつオフィスに入った香奈恵は、そのまま自分のデスクへ向かう。

続いて入ってきた雅之は、報告することがあったのか、部長のデスクに歩み寄ってなにか話し込んでいた。

遠目に見る彼は、相変わらず野暮ったい眼鏡がトレードマークのどこにでもいそうな男性社員だ。

それなのに、さっき扉を開けた瞬間、なんだか開けてはいけない扉を一緒に開けてしまったように感じるのは、気のせいだろうか……

受話器を取り上げてブランシェの多田に電話をかけつつ、香奈恵はそんなことを考えていた。

◇　◇　◇

雅之との約束の日。

彼の家族との食事会は、平日の午後六時からという一般的な会社勤めの場合だと、なかなか微妙な時間設定だった。

食事会には、彼の両親だけでなく、兄も出席するとのことだ。

わざわざ都合を合わせて家族が休みを調整したのだとしたら、顔を出すのが偽者の恋人というのは、本当に申し訳ない。

微妙に罪悪感を抱えつつ、香奈恵は店のショーウィンドウを鏡代わりにして前髪の乱れを整えた。

食事会の前に少し打ち合わせをしようと雅之に提案されたため、この近くのカフェで待ち合わせをしている。

ショーウィンドウに映る自分は、夏を意識した清涼感のある水色のワンピースに、アクセントとして白を基調としたシンプルなデザインのイヤリングを合わせている。

仕事中はきっちり結い上げている髪も、今日はポニーテールにして毛先を緩くカールさせ、メイクも明るめの色を選びいつもより華やかな印象を心がけた。

恋人の両親に挨拶をする――というコンセプトなので、過剰にかしこまることなく、かといって雅之の面子を潰すことのない、ほどよいお洒落を心がけたつもりである。

――でもこれ、逆に堀江さん的に気合入りすぎって思われないかな？

無難なファッションをセレクトできているとは思うが、恋愛経験がほとんどない香奈恵は、こういう場合の正解に自信が持てない。

香奈恵が無難と思っていても、雅之が恋人役に求める装いとしてはどうなのだろう。

プライベートで顔を合わせるのが初めてなので、待ち合わせの時刻が迫ってくるとあれこれ気になってくる。

――こんなことなら、昨日のうちに服装の要望を確認しておけばよかった。

あれこれ悩み、睨むようにウインドウを覗き込んでいると、肩をポンッと叩かれた。

「キャッ」

驚いて飛び跳ねるようにして体の向きを変えると、いつの間にか隣に立っていた見目麗しい男性が目尻に皺を寄せて緩く微笑んでいる。

――誰？

香奈恵は相手から距離を取りつつ、男性の全身に視線を走らせる。

背の高い男性で、すっきりとした鼻筋に、知性が漂う切れ長の目が印象的である。髪をオールバックで固め、フォーマルなスーツを洒落た感じに崩して着こなす姿はファッ

ションモデルのようでブライダル用のフォトモデルを頼みたいくらいだ。
スーツのジャケットを片手にかけ、シャツを第二ボタンまで外し、袖も肘のあたりまで捲っているので、引き締まった体つきをしているのがわかる。
「えっと……」
——まさかとは思うけど……これって、ナンパ？
見知らぬイケメンに親しげに微笑みかけられる状況にそんな言葉が思い浮かぶが、それと同時に、こんなイケメンが自分をナンパするはずはないとも思う。
もしかしたら弄月荘の利用者か、仕事で会ったことのある人かもしれない。
営業用スマイルを浮かべつつ高速で記憶を辿ってみても、思い当たる人がいない。そもそも、これほど存在感のある色男、そうそう忘れるはずはないのだが。
困惑したまま相手の顔を見上げていると、ふと男性の唇の右下にあるホクロに目が留まる。
——唇下のホクロ、色っぽいな……
そこまで考えて、心に閃くものがあった。そんな香奈恵の表情を読み取ったように、相手が口を開く。
「女子っぽいお洒落をしているチーフって、新鮮ですね」
馴れ馴れしい口調で話しかけてくる男性を、香奈恵は呆然とした表情で眺めた。よく

見たら、彼の左の首筋にも縦に二つのホクロがある。まさかという思いのまま震える指で相手の顔を指し、口を開いた。
「あな……た……堀っ……さ……っ」
「恋人なら、今日はその呼び方はやめてくれ」
楽しげな口調で発せられる声は、聞き慣れた雅之のものだった。だけど目の前にいる男性と、香奈恵の知る雅之のイメージが結びつかない。
「今日は、俺のことは名前で呼んでよ。俺もそうするから」
雅之は、中途半端な位置で震えている香奈恵の指をそっと左手で包み、そのまま手を繋いだ。
そして、呆然とする香奈恵の手を引いて歩き出す。
「堀江さん、ですよね？」
思考の処理が追いつかず、手を引かれるまま歩く香奈恵は、恐る恐るといった口調で確認する。
すると雅之は、チラリと視線を向けて大袈裟にため息を吐く。
「他の誰だと？」
こちらに流し目を送ってくる彼は、ため息も含めてどこか芝居じみている。
穏やかでいて、どこか遊び心のある空気感は、間違いなく雅之なのだけど……

「だって、眼鏡してないし」
戸惑いが大きすぎて言い訳がましい口調でもごもごと話すと、雅之は軽快な笑いを零す。
「香奈恵さんにとって俺の印象って、眼鏡だけ？」
ひどいなぁと、非難するふうでもなく雅之が笑う。
「あと、唇の下と首筋にあるホクロ」
「ふぅん」
妙に鼻にかかる甘い声で雅之が首をかしげる。
耳に届いたその声に肌を撫でられたような錯覚に襲われ、思わず耳朶を強く揉んでしまう。
「それに耳の形……」
イヤリングが指先に触れるのを感じながら、そう付け足す。
「それ、俺が入ってすぐの頃にアドバイスしてもらった。女性の顔はメイクや髪型で印象が大きく変わるけど、耳の形は変わらない。だからお客様の顔を覚える時、顔と一緒に耳の形を記憶しておくといいって」
懐かしそうにそんなことを話す彼は、やはり雅之だった。
だけどこれは……どういうことなのだろう。

「あの……とりあえず、手を……」
落ち着かなくて、繋がれている手を揺すってみる。
だけど離すどころか、逆に強く握り返されてしまった。
「恋人なら、これくらい当然でしょ」
雅之は悪戯を楽しむ子供のような顔をして、楽しそうに手を揺らす。そうやって至近距離で彼が動くと、あの夜と同じ香りがほのかに漂ってきた。
「それは、堀江さんのご両親の前だけの演技で……」
「香奈恵さん、本当にぶっつけ本番で恋人のフリをする自信ある？」
「そ……それはっ」
そう言われると生真面目な性格もあり、繋がれた手を振り解くことを躊躇ってしまう。
香奈恵の抵抗がなくなったことで、雅之は繋ぐ手の強さを緩めた。それでも繋いだ手を放してくれないのは役作りのためだろうか。
「というわけで、ここからは、お互い下の名前で呼び合うこと。それに、堅苦しい言葉遣いも禁止」
「でも……」
困り顔で見上げる香奈恵に、雅之は軽くウィンクを返して「香奈恵」と呼んだ。
女性の名前を呼び捨てにすることに躊躇のない彼に、自分とは違う慣れを感じた。自

然な振る舞いに、こちらが彼の本来の姿ではないかと思えてくる。
「……」
それに比べて、男性をファーストネームで呼ぶことに慣れていない香奈恵は躊躇うばかりだ。下の名前を知らないわけじゃないのに、喉になにかがつかえたように名前を口にすることができない。
「その恥じらい方は、新鮮でいいね」
頬を赤らめて口をパクパクとさせる香奈恵を覗き込み、雅之は楽しそうに笑った。
「違う人みたい」
当初待ち合わせ場所にしていたカフェまで手を繋いで歩き、注文を済ませた後、香奈恵はやっとの思いで声を発した。
「そう？」
テーブルに片肘を突き、そこに顎を預けて艶っぽく笑う雅之は、自分の魅力を十分承知している様子だ。そしてそれを惜しみなく振り撒いてくる。
「眼鏡を外すと、印象が全然違うんですね」
そんな言葉で片付けられる変貌ぶりではないが、なにをどう表現すればいいのかわからない。自分の言葉の拙さを理解しているので「休みの日は、コンタクトなんですか？」と言葉を足す。

その言葉に、雅之は面白そうに目を細めた。
「いつものあれは、伊達眼鏡だよ。俺、視力は悪くないから」
「じゃあ、なんで眼鏡してるんですか？」
「新郎より目立つと悪いから」
キョトンと目を見開いて数回瞬きする香奈恵に、雅之はこともなげに返す。
かなり自惚れた台詞に聞こえるが、モデルや俳優と見紛うほど整って華のあるこの姿を前にすると、否定ができない。
それと同時に、晶子が彼に執心していた理由を理解した。
「もしかして西村さんは、堀江さんのこの姿を知っていたんですか？」
晶子はいつも自分の結婚相手の条件に、『イケメン』や『御曹司』といったキーワードを挙げているので、この姿を見れば納得がいく。
「言葉遣い」
しみじみと声を漏らす香奈恵にそう注意した雅之は、「それと下の名前で呼んでくれ」と促してから続ける。
「彼女の場合、もっと打算的な理由で俺にアプローチしてると思うよ」
「……？」
イケメンと付き合いたいというのは、十分打算的ではないだろうか。香奈恵が首をか

しげていると、飲み物が運ばれてきた。雅之は、配膳の妨げにならないように肘を退けて背筋を正す。

「香奈恵って、上司として俺のことどれくらい把握してる？」

配膳が終わり、スタッフが離れたところでそう聞かれた。

その問いに、香奈恵は自分の前に置かれたアイスティーをストローでかき混ぜながらしばし考える。

「えっと……外資系金融機関でかなりの地位にいたと。前職の地位や年齢に固執することなく、基礎から仕事を学びたいという要望で私のもとに配属されたと聞いています」

見るからに経験豊富なエリートである彼を、部下として受け入れてほしいと打診された時は、正直驚いた。それでも彼を受け入れたのは、当時の部下が晶子しかおらず、人手不足を感じていたからだ。

その際、部長からは『扱いにくいかもしれないが十分気を付けて接してほしい』と何故かやたらに強く念押しされた。

まあそれは、雅之のキャリアや二人の年齢差を考えてのことだろう。

だがその心配は杞憂に終わり、部下となった雅之は、香奈恵が恐縮してしまうほど上司の自分を立ててサポートしてくれている。

香奈恵の主観を含めたそんな言葉に、雅之は嬉しそうに口角を持ち上げた。

「そう言ってもらえてなにより。香奈恵の部下になれてよかったよ」

屈託のない彼の言葉に香奈恵は照れくささを持て余し、耳の横から流している髪に指を絡めて消え入りそうな声で囁く。

「それは、私の……」

初めは多少の緊張はあったが、今は雅之が自分の部下になってくれたことに心から感謝している。いい機会なので、そのことを彼に伝えたかったが、どう言葉にすればいいのかわからない。

伝えるべき言葉を探していると、雅之が言う。

「俺の家族に関しては？」

再びテーブルに肘を突いた雅之が、軽く右眉を持ち上げて回答を促す。

感謝の思いを言葉にしそびれたことを残念に思いつつ、香奈恵は、素直に自分の持っている知識を言葉にする。

「えっと……息子の結婚を急かす家族がいるんですよね。だから私に恋人役を頼んだ。……あと、イベント関係に顔が利く仕事をされているんでしたっけ？」

今回の件で得た情報をまとめると、そういうことになるだろう。

「なるほど、そういう理解なのか」

香奈恵の言葉に、雅之はよしよしと頷くと、癖のある笑みを浮かべる。

「香奈恵、社内の噂話に興味ないだろ？」
「……ええ、まあ」
雅之の質問に、香奈恵は頷く。
正直、まったく興味がない。陰であれこれ詮索するより、知りたいことは本人に直接確認した方が早いと思っている。
それに噂話にはどうしても話す側の主観が入ってくるから、そんな曖昧な情報に振り回されるのは嫌だし、その場の流れで悪口の賛同を求められるのも不快だった。
その説明を聞いて、雅之はクスクスと笑う。
「香奈恵らしい意見だよ」
「それはどうも」
雅之の声に嫌味の色は感じられない。香奈恵の性格をありのまま受け入れて、好感を持ってくれているようだ。
だけど香奈恵としては、この性格が男性に可愛げがないと評され、女性社会では浮いた存在になってしまうことも承知している。
それでも、周囲に合わせるためだけに、無理やり自分の感情を呑み込んでわかったフリはしたくないから仕方ない。
自分は自分。それでいいと思っていたはずなのに、甘い表情で見つめられると、彼の

立ち読みサンプル
はここまで

目に自分がどう映っているのかやけに気になってしまう。
そのせいで感情を空回りさせつつ、香奈恵は自分の考えを言葉にしていく。それに耳を傾ける雅之は、楽しげな表情でコーヒーを啜る。
いつもと違う二人の距離感に緊張し、香奈恵は自分のアイスティーのストローに口をつけた。
わざわざ言葉にするつもりはないけど、この性格に加えて人を頼るのが苦手なことも災いして、学生時代の恋人に『女として可愛くない』とフラれた過去がある。
「……」
嫌な過去を思い出したと、ストローで氷をかき回していると、カップを置いた雅之がそっと息を吐くように言った。
「俺は、香奈恵のそういう打算がなく、他人の言葉に振り回されないところが好きだよ」
「……」
さらりと告げられた『好き』という言葉に、ストローを回す指の動きが止まる。
もちろん彼の言う好きがライクであることはわかっている。それでも見目麗しい男性に、甘い声でそんな言葉を囁かれるとつい意識してしまう。
もしかしてこれは、彼の家族の前で恋人として自然な振る舞いをするためのムード作